法政大学での50年

田中, 優子

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

67

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2021-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024179>

法政大学での50年

法政大学総長 田 中 優 子

今、これを書いている時点で、私が法政大学で過ごした年月は50年になる。半世紀だ。それを書くだけで自伝になってしまうが、皆さんに伝えるべきは私の自伝ではなく、法政大学の50年であろう。しかしほとんどを一教員として過ごしたわけだから、その歴史には偏りがある。それぞれの所属学部で得た情報および価値観による偏りである。そればかりでなく、私が最初に過ごした10年は学生としての10年であるから、その視線しかもってはいない。まことに、ひとつの大学について語るだけでも、人の視野とは極めて狭いもので、自分本位である。まして日本や世界となれば、いかに一個人の経験に基づいた視野が狭隘であるか、思い至る。

そこで、一つの柱を設けることにする。それは「自由」だ。その時々で私は何を自由と思い、どう自由を生きて抜いていたか、それを語ることにする。お気づきだと思うが、これは大学憲章のタイトル「自由を生き抜く実践知」に関する。この言葉はそれぞれが「私にとって自由を生き抜くとはどうすることであるか?」「私にとって実践知とは何であったか?」を問うことなしには、効力を発揮しない。解説も説明も不要。ただ、「私にとってそれは何か?」を問えばよい。なぜならこの大学憲章の言葉は、ものを考えるための「場」であり「方法」であるからだ。そのようなものとして作られた。

学ぶ学生として

私個人にとっての自由とは何かを語ろうとするとかなり遡る。幼稚園の運動会まで遡ってようやく始められるのだが、先述したようにここは私の自伝を語る場ではない。法政大学に入学したところからにする。私が法政大学を受験しようと思ったのは、高校の教師の一言だった。「面白い先生がたくさんいる」。どう面白いかは、その名前を聞いただけでわかった。前提として、私は「物書き」になるために文学部日本文学科を希望していた。彼女が挙げたなかで私が注意を惹かれたのが、小田切秀雄と益田勝実であった。能に詳しく仕舞の稽古をしていたその教師は当然、表章（おもて・あきら）や杉本圭三郎の名前も挙げたのだと思うが、私はすでに読んでいた小田切秀雄と益田勝実の名前を聞いて関心をもち、さらに調べると、法政には石母田正も西郷信綱もいた。彼らの本も読んでいた。大学教授たちがテレビにも出始めた時代である。小田切秀雄も外間守善も廣末保も、研究者であるだけでなく評論家であり、マスコミに出る「文化人」でもあった。

そして1970年に法政大学文学部日本文学科に入学したのである。当時の4年制大学進学率は17.1%、女性はたった6.5%だった。鎌倉市の山のなかにあるカトリックの女子高から入学した私に、同じ高校出身の先輩は全学生のなかで一人しかいなかった。今からは考えられないが、法政大学は私がいた女子高校のほとんどの生徒が避けて通る大学だったのである。男の大学、パンカラ、野球が強いだけ、学生運動は激しい、国際的なイメージのかけらもない。そう思われていたのである。しかし、教師も学生もきわめて面白かった。

1960年代後半から1970年代はじめにかけて、全国の大学はロックアウトとバリケードストライキが繰り返されており、ほとんど授業が開講できなかった年もある。しかし1970年、71年は、授業は断続的であったが開講されていた。当時1、2年生は語学や体育をもとにしたクラスに編成されており、「第一教養部」の授業を履修したのだが、いくらか専門科目の講義も受講できた。幸いなことに、クラス担任は『平家物語』の研究で知られた杉本圭三郎だった。『平家物語』の授業は講義よりも学生の発表に力を入れていて、私も発表の準備に自分で読み、調べ、解釈し、それを語ることで多くのもを得た。初代の沖縄文化研究所長で天皇への沖縄学の進講者でもあった外間守善の『おもしろさうし』も、大教室で受講した。「長澤漢和」と呼ばれるほど漢和辞典の編纂で知られていた長澤規矩也の授業も受講した。常に和服に袴をつけていた。益田勝実の授業は専門の講義のほかに「国語科授業法」があった。私は教員免許を得るためにその授業を履修したのだが、そこで石牟礼道子の『苦海浄土』に出会ったのである。前年に刊行されたばかりだったが、古代文学者であるだけでなく民俗学者でもあり、国語教育にも自分なりの考え方をもっていた益田勝実は、その価値を見抜いていたに違いない。そして学生たちにぜひ伝えたいと思ったのだろう。教室で『苦海浄土』を取り出して、朗読したのだった。その時の衝撃は私に後々まで大きな影響を与えた。石牟礼道子と対談し、その作品について語り、2020年10月にはようやく1冊にまとめることができた。石牟礼道子を支え続けた本学社会学部出身の歴史評論家、渡辺京二との交流も、そこに由来する。ちなみに、私はこの1、2年生のころ、後に私の指導教授となる廣末保の講義を履修していない。近世文学（江戸文学）は私の視野には一切なく、まったく関心のない領域として、放置されていたからである。

もっとも大きな関心は小田切秀雄の近代文学論にあったから、もちろん専門科目の講義を受講した。しかし失望したのである。講義をじっくり聞いて、あることに気づいた。それは「イデオロギーで文学を読んでいる」ことだった。読むことが自らの思想を形成するのではなく、その逆なのである。まず政治的イデオロギーがあり、そこにあてはめて作品を評価するか否かを定める。これは、私がかつとも大切にしている読みの面白さ、つまり自由な連想と展開には反する読み方である。文学は言葉でできているという根本を逸脱し、文学すなわち筋書きだと考えないと、マルクス主義に適合しているかどうかは判断できない。

この私の選択の間違いをどうするか。そこに大きなヒントを与えてくれたのが構造主義言語学だった。教養部の教授だった言語社会学者の野林正路が開いていた「言語社会学」は方言調査をおこなう授業だったが、理論的な柱は構造主義言語学だった。調査方法を開拓するために教室授業では

ソシュールからはじまって音韻論、統語論、意味論をめぐる本を読み、ノーム・チョムスキーの生成文法にも、フランス構造主義文学論の成果であるロラン・バルトにまで及んだ。これらは1年生のときにすべて学んだわけではなく、学年を超えて在学中にずっと学んでいた、ということだ。「言語社会学」は単なる授業ではなく、単位取得が終わった学生たちも集まって学び続けた、なかば課外活動的授業だったのである。近代文学論への失望はかなりのので、この言語学の学びのなかで救われていた。そして3年生のとき、予定通り所属した小田切秀雄ゼミで私は、「江戸文学」に出会ったのである。

小田切秀雄自身が批判していた江戸時代の文学を、小田切ゼミが取り上げるはずもなかった。その年のテーマは昭和10年代の文学、つまり日中戦争がはじまり、国家総動員法が成立し、太平洋戦争に突入していく時代の文学である。ゼミの課題として示された作家のなかに石川淳がいた。彼が書いた『マルスの歌』を反戦小説ととらえたからである。事実、この作品を掲載した雑誌は当時、発禁処分になっている。しかし『石川淳全集』を読んだ私のまなざしは、まったく別のところにくぎ付けになった。それが、江戸文学論だったのだ。自分では思ってもみなかった出会だった。その時から江戸文学を独自に学びはじめ、大学院に進む決断をした。次の年にはゼミで発表するために三島由紀夫を読みこんだが、結局好きにはなれなかった。『石川淳と精神の運動』という卒業論文を提出し、学部を卒業したのである。

ところで教養課程では、本学出身で、日本女性として初めてフランスで文学博士号を取得した片岡美智教授からフランス語を学んでいた。また構造主義言語学への関心が高まり、日仏学院やアテネ・フランセにも通っていた。その後は大学院に入学するために、日仏学院で片岡美智教授が開いていたクラスに入り、原文読解に取り組んだ。

フランス文学とも、なにかと縁があった。最初は小学生のころに通っていた古本屋である。古本屋には子供用の本というコーナーはない。子供は大人向きの本棚のなかで面白そうな本を探すのだ。『フランス詩集』はそこで手に入れたお気に入りの1冊で、とりわけシュペルヴィエイユの詩を暗唱した。大学ではフランス語の授業でアラン・ロブ・グリエを知った。教科書として読んだとしたら難しすぎる。たぶん教師が「アンチ・ロマン」の話をしてくれたのだ。大学院の入試が迫ったころは、日仏学院で開講されていた、ロラン・バルトについてフランス語だけで講義するクラスにも入ったが、お手上げだった。仕方なく『コミュニケーション』というフランス語の雑誌で、ジュリア・クリステヴァを友人と一緒に読むことにした。その友人が、「言語社会学」で出会った社会学部の成田康昭氏、後の立教大学教授（現在名誉教授）である。翌年、私はフランス語の勉強の甲斐があって日本文学専攻をトップの成績でとおり、育英会（現日本学生支援機構）の奨学金も得て、廣末保研究室に入ったのである。ちなみに、社会学研究科に入った成田氏の紹介で私は大学院生の時代から中野収教授、平野秀秋教授の69年館（現・法務研究科の建物）の研究室に出入りし、放送関係の合宿などにも同行した。

大学院生時代のこととなると、自分の研究に夢中で、法政大学そのものの特質を思い出すことがあまりない。現在ボアソナードタワーが建っている場所にあった、西日の強く差し込む古い建物が

大学院棟で、学生がひとりでいられるような部屋も、本を置いておける場所もなく、家と大学院と図書館と家庭教師のアルバイト先を行き来する毎日だった。指導教授の廣末保教授とその学生たちが、私を奇異な存在に思っていることは確かだった。当時の大学院生たちは他大学出身者が多く、ずっと古典文学を学んできたか、あるいは他大学の法学部や経済学部出身で、廣末先生の近松論や『前近代の可能性』に惹かれて入ってきた人たちだった。近代文学出身者は「語る言葉が違う」と思われていたようだ。しかし私はそれどころではない。学部時代に独学しただけで、近世文学（江戸時代の上方の文学と江戸の文学の両方を含むときの名称）の全体像がわからない。くずし字も読めない。なにしろ私は、独自に勉強を始めたころ初めて廣末先生の講義に出たのだが、「まったくわからない」ことに衝撃を受けたのだった。江戸文学に強く惹かれ、自分なりに勉強したつもりでも、歯が立たない世界だった。なぜ石川淳がわかり廣末保の言葉がわからなかったのかは、その後理解できるようになった。その詳細は『日本文学誌要』101号（2020年3月・法政大学国文学会）の「廣末保の仕事」に詳しく書いた。

それでも法政大学の大学院ならではの特色があった。それは「専門」という名前の檻に閉じこもらないことである。法政大学の多くの教員が、専門分野の業績だけでなく、人文社会科学上の新しい発見をした。廣末保の仕事も文学だけでなく、その根底にある時代特有の文化創造の方法、近世社会の人々の関わり、歴史的な転換期の意味など、多くの問題提起と発見をした。その視野は、花田清輝とともに演劇活動をおこない、鈴木忠志をはじめとする前衛演劇運動に関わり、網野善彦、阿部謹也と中世史を語り、西郷信綱と古代文学を論じ、藤田省三と日本政治史を議論し、ゼミやゼミ外の勉強会では学生たちとサルトル、ベンヤミン、ミハイル・バフチン、カルロ・ギンズブルグ、アナール派の歴史書、ドス・パソスの『U.S.A』に至るまで読む、という広さをもっていた。

さらに、学会に関わらなかった。このことは後から考えると、研究の道を進む弟子たちにとってはなほだ不利である。しかし文学の世界は「古代文学会」「中世文学会」など、時代ごとに分かれている。近世文学の場合、そのなかで研究することによって、中世とのかかわりも、近代との連続性も見えなくなる。さらに、江戸文学は都市構造、浮世絵、美術工芸、演劇、音曲、舞踊、経済、貿易、産業、そして同時代の世界など、ありとあらゆる分野とともに考えることによって、ようやく理解できるのだ。分野を渡る自由を確保しないことには、江戸文化を理解することはできない。廣末保は益田勝実とともに、時代を区切らない日本文学協会を拠点にした。そのことによって私は他大学の中国人の研究者や、中国文学と江戸文学の関係に深い関心をもつ他大学の研究者とともに、中国語文献を読む機会を得ることもできた。それがのちの中国での研究や、ベトナムへの深い関心につながった。この自在さによって私は、研究と執筆という両方を行き来し、続けてくることができた。廣末保が許容してくれた、分野を超えた発想と連想の自由なしでは私は息がつかまって、研究という世界にいられなくなったかも知れない。

考える学生として

私は、学びと研究のみの視点から法政大学を感じていたわけではなかった。一人の人間として「問うこと」「考えること」「行動すること」も、法政大学という「場」でおこなっていた。

私が入学した1970年は、中村哲（なかむら・あきら）総長の時代である。1972年に沖縄文化研究所を設立したことで知られる。警官隊の学内導入をほのめかした秦野章警視総監と対立しながら学生との大衆団交を繰り返す、終に警官隊を導入することなく事態を乗り切った人でもある。すでに壊された55・58年館のなかの511教室。そこが繰り返される大衆団交の場所だった。多摩へのキャンパス移転問題の混乱で総長を退任し、後は社会党の参議院議員になった。

大学は様々な事件や悲惨な出来事の現場でもある。そのもっとも大きなものは1943年の学徒出陣であろう。法政大学からは約870人が出陣を余儀なくされた。学徒出陣については「大学史委員会」がヒアリングを含めて多くの史料を集め、2017年に「法政大学と出陣学徒最終報告書」としてまとめた。したがって学徒出陣や、1945年の焼夷弾による富士見校舎の消失などは、大学史に掲載され公開されている。

しかし公開されていない歴史もある。1970年は、大きな安保闘争が展開した最後の年である。私は主に、青いヘルメットを被っていた反帝学生評議会系のノンセクトのサークル連合の学生たちと行動をともにし、6月の安保闘争のデモや三里塚にも出かけていた。集会の時には511教室にもいた。安保のデモの時に偶然、路上で兄と会った。兄はその時、東大の都市工学研究科の大学院生だった。東大は1968年3月に医学部インターンの誤認処分があり、教授会がその誤認を認めなかったことで医学部が安田講堂を占拠した。大学は機動隊を導入した。それに対して7月に学生がバリケード封鎖を挙行し、山本義隆を議長として東大全共闘が結成された。一方、1968年5月には日大で東京国税局の家宅捜索により22億円の用途不明金が発覚した。秋田明大を議長として日大全共闘が結成され、9月30日に学生と当局の全学集会が開催された。ここに3万5千人の学生が参加した。さらに1968年11月22日、東大本郷安田講堂前で「東大、日大闘争勝利全国学生総決起集会」が行われ、2万人近くの学生が集まった。1969年にかけて、各大学の個別の問題を軸に日本の主要な国公立大学や私立大学の80%に該当する165校が、全共闘による闘争状態にあるか全学バリケード封鎖をした、と言われる。高校生だった私の家には、チラシ類や雑誌類など、闘争にかかわりある様々なものが持ち込まれていた。テレビを見ながら兄の話も聞いた。『朝日ジャーナル』も『世界』も『展望』も家で読んだ。

そういう環境にいて、私は1970年に法政大学に入ったときに期待したのは文学の勉強だけでなく、ベトナム戦争を筆頭に、社会や世界で起きている様々な事象を知り、考えることだった。今のようにインターネットのある時代ではない。新聞とテレビと雑誌がその情報源であり、それらをどう読み、どう考えるかは、対話の中でしか確認できないのである。まさにそれは「実践知」で、自分が立っている場所、行動する場所で考え、学生たちの話を聞き、自分で判断する日々だった。

そのなかで1970年8月3日に起きた東京教育大生リンチ殺人事件が忘れられない。その日の夜、

私は中核派に属する文学部自治会の女性に、東京駅まで呼び出されていた。オルグ（勧誘活動）の対象にされていたのである。喫茶店でしばらく話を聞いて帰宅した。明けてわかったのが、その夜の事件だった。8月3日の夜中、六角校舎の地下で中核派による凄惨なリンチが繰り広げられ、東京教育大の海老原俊夫氏が死亡したのだった。その後13人に逮捕状が出る。伝聞によれば、青山学院大3人、予備校生3人、横浜国大2人、中央大、東海大、慶応大が各1人で、法政大生は2人しか含まれていない。大学の事件というより、セクト闘争だった。サークル連合の拠点であり、私も頻繁に出入りしていた六角校舎はただちに閉鎖され、翌年、取り壊された。六角校舎とは、ジャズピアニスト山下洋輔氏の祖父で、1930-31年に法政大学工業学校の校長を務めていた建築家、山下啓次郎氏が建てた建築物である。1949年より、安部公房が会長をつとめる「アヴェンギャルド芸術研究会＝世紀の会」の場となり、その後は文科系のサークル連合が使っていた。そしていつの間にか、政治運動の拠点となっていた。

周知のように、このようなセクト原理主義に純粹化された学生たちの一部は1972年、浅間山荘事件を起こす。しかし全共闘運動とは本来、党派闘争ではない。現在のピアネットワークのように、課外活動である。現在でも、活動のなかで社会の現実を知り、その現実に対して自分が何等かの役割を果たしたいと思う学生はいる。それと基本的には同じなのである。しかしその考えることへの渴望や行動は、どの大学においても、セクトの資金源として狙われ、いわば乗っ取られたようなかたちになった。各学部の自治会費は、公正な投票を経ないまま党派に吸収されていった。その利権をめぐり、党派闘争が起こったが、まるでそれは「正義」をかけた戦いであるように喧伝された。私は内ゲバの実態とその背景に深く失望した。多くの学生や市民が、運動から去っていった。

教員たちはどうしたらよかったのだろうか、とよく考える。すでに党派のもとに組み入れられてしまった党派闘争からは、まず学生や大学を守るしかない。自治会費代理徴収の中止は、当然のことだった。しかし課外活動は大学の重要な側面なのである。そのなかに政治的な議論があってももちろん良い。この場合、「自由」をどう考えるか、という問題にぶつかる。すぐにわかることは、「自由を生き抜く」ことは、一部の人間にではなく、学生や教職員を含め、すべての人に可能でなくてはならない、ということだ。それを根拠なく妨げる暴力が働いてはならず、自由を制限するのであれば、納得できる理由がなくてはならない。教職員に必要なのは、なぜ制限が必要なのか、説明する言葉と情感の力である。私たちはこの一年、日本を除く世界の様々なリーダーの中に、その言葉と情感の力を感じ、一方で、日本の中にその貧しさを感じた。私たちはいっそう、言葉を鍛えねばならない。

課外活動の場でもある大学という場所は、学生だけでなく教職員や、教職員の関係する外部団体にとっても、重要な活動の場になることがある。やはり1970年の8月22日と23日、「侵略＝差別と闘うアジア婦人会議」が法政大学で開催されたことを、私は後に知った。これこそがいわゆる「ウーマン・リブ」運動の始まりであった。日本の女性解放運動は、明治時代の平塚らいてうがそうであったように、政治運動であるより先に文化運動、思想運動の面が強い。ウーマン・リブという言葉はもう聞かれなくなったが、この運動では、侵略＝差別と闘うアジア婦人会議という名称が表し

ているように、女性は被害者・被抑圧者だ、という立場に立たない。女性も加害者であり、抑圧者である。とりわけ「男のようになる」という目標を据えてしまったなら、自分の中の暴力性と加害者性を許すことになる。その自覚から出発したのがウーマン・リブであった。この視点は、「男性のようにはならない」という決断を語った平塚らいてうの、日本独自の女性解放運動の流れの中にある。とにかく、法政大学はこのような動きに場所を提供したことを、覚えておきたい。

すでに述べたように、1972年、沖縄返還の年に、法政大学には沖縄文化研究所が設立された。1973年には、現総理大臣、菅義偉氏が法学部政治学科を卒業している。1974年に私は卒業して大学院に進学した。その翌年の1975年、翁長雄志前沖縄県知事が、法学部法律学科を卒業した。多様な学生がいる大学なのである。

教員として

私は修士課程と博士課程で合計6年、大学院に在学し、1980年4月、第一教養部の専任講師となった。まず驚いたのは、11人分の研究室が田町校舎（現デザイン工学部校舎）近くに賃借しているビルの、狭い一室だけだったことだ。田町校舎で授業する時の資料を置くしか使いようはなく、誰も使っていなかった。この状況は80年館が建つと解消されたが、研究室は二人部屋だった。

第一教養部には文芸評論家の柄谷行人、本学出身の女性教員である文学者の駒尺喜美、詩人の宗左近（そう・さこん）、やはり詩人の木島始、小説家の清岡卓行、英文学者の田嶋陽子、脳生理学者で医学博士の千葉康則、後に沖縄文化研究所所長となる経済学者の屋嘉宗彦などがいた。私が教わった片岡美智、長澤規矩也の両教授はもう退職なさっていた。たいへん面白い人たちのいる学部で、まだ田嶋陽子は知られていなかったが、多くの著書がありもっともマスコミに出ていたのは千葉康則だった。

教養部には歴代、二つの大きな事件があった。ひとつめは1933年に起きた「法政騒動」である。夏目漱石門下の作家の森田草平が、友人で同じ漱石門下だった学監兼予科長・野上豊一郎の解任を迫ったことから始まった。他の人物（つまり自分）を学長に推すべき、大学の隣の旧陸軍用地を購入すべき、前学長が残した巨額の負債をどう解消させるか、法政大学出身者をもっと教員に採用せよという意見などをもって野上豊一郎に迫った。しかし、野上は森田も同様に処分しなければ、と辞職には応じない。秋山雅之介学長は野上の学監と予科長の職を解き、教授の休職を命じた。さらに野上支持の予科教授・講師47名を解職した。この事件については社会学部の元教授であった宮永孝氏が2013年3月の『社会志林』59-4号に掲載した「昭和八、九年の「法政騒動」」で、実に面白く書いている。またこの時に法政大教授を辞職した小説家の内田百閒が、そのときの森田草平とのやりとりを『学校騒動記』『学校騒動余録』『予科時代』『実説艸平記（じっせつそうへいき）』など、幾編もの小説に書いた。喜劇仕立てで実に面白い。内田百閒と法政大学の学生との交流の会である「摩阿陀会（まあだかい）」を書いたのが、百閒の『まあだかい』と『ノラヤ』であった。それらを後に黒澤明が映画したのが、黒澤明の最後の監督作品『まあだだよ』であった。こう振り返

ると、騒動は作品にもなることがわかる。

さて、二番目の事件は法政大学の多摩移転である。まず、1959年に制定された「工場等制限法（首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律）」で都心では大学の新設・増設などが制限された。まだ18歳人口は増え続け、大学進学率も上がり続けていた。各大学は規模を大きくしなければならなかった。都心の大規模私大は新たなキャンパスを郊外に作ることで、学部と学生数を増やすことになった。法政大学は1960年代に町田市に土地を取得し、1984年、社会学部と経済学部が多摩キャンパスに移転した。移転の結果、市ヶ谷キャンパスに新学部および新校舎増設が可能となり、この後、6学部が15学部が増えたのである。それだけなら事件でも何でもないが、移転に当たっては、二つの大きな変化が必要となっていた。まず、全面移転が否定された。いくつかの学部の移転がおこなわれるとなると、そこには学部の教養部からの自立、すなわち「縦割り」が必須となる。そこで教養部の改組の手順を考えねばならない。有力な構想が新学部構想であった。第一教養部の教員を核にして、今までにない新しい学部を多摩キャンパスに作ることで、学生にとって魅力的な郊外キャンパスとし、そこで新学部と社会学部、経済学部が学生を集め、大学敷地の確保によって可能になった学部増設を市ヶ谷でもおこなう、という構想である。何度かの名称や構想の変更があったが、実際に文部省（当時）に申請されたのは「文化科学部」構想である。自然科学、情報科学、社会学、文学を統合する、まったく新しい学部であった。

なぜ頓挫したかと言えば、改組に反対する教養部教員による、様々な抵抗だった。入試採点は教養部に頼っていた。そこで教養部の英語教員たちが採点拒否をした。私は毎年、国語の採点担当であったから、その日々は忘れられない。人数の多い教養部の票を頼りにする理事は、文部省に行って大学が割れてることを明かした。大学執行部は申請を取り下げざるを得なかった。1983年6月、文化科学部設立を断念し、中村哲総長は辞任した。多摩キャンパスの図書館には、文化科学部創設のために購入した図書が今でも取められている。

私は1980年の専任講師着任後間もなく、この動きの渦中にあった。新学部に移籍する教員として打診され、承諾したからだった。この動きのなかで、増島宏常務理事、増田壽男経済学部教授（元総長）、本学出身の村串仁三郎経済学部教授、文学者の栗津則雄経済学部教授、平野秀秋社会学部教授、そして第一教養部から移籍するほかの予定者たちと、頻繁な情報交換をした。しかし新学部は実現せず、私は第一教養部に敵対者として残ることになった。何度も教授会で罵倒され、廊下で会ってもそっぽを向かれる存在になった。多摩移転は大学を二分した。大学の分裂がどういう環境を生むのか、目の当たりにしたのである。しかしその時から第一教養部を去るまで、重要な委員や学部執行部の役目は一切依頼されず、講義以外には大学外の講演や執筆に集中することができた。そのあいだに、北京大学交換研究員、オックスフォード大学在外研究員などを体験している。しかし入試問題の作成と管理、採点とその管理は教養部教員の仕事である。国語の入試に関わることを免れたことはない。

やがて教養部改組のための市ヶ谷再開発と、市ヶ谷キャンパスでの新学部設置が始まった。1999年に第一教養部教員を中心にした国際文化学部、第二教養部教員を中心にした人間環境学部が設置

された。次の年にボアソナードタワーが建った。この新学部設置の経緯と配属については、私は蚊帳の外にいて全く知らない。

2003年3月、第一、第二教養部が正式に改組され、新学部配置されなかった教養部教員たちの分属が始まった。私は前年から社会学部に設置されていたメディア社会学科に4月から分属となった。それまでも兼任講師として「コミュニケーションの歴史」を担当し、社会学部への配置は希望していたことだった。同時に国際日本学インスティテュートで大学院教育と国際日本学研究所の活動も始めた。社会学部に移って大きな変化があった。教員になって23年目に、初めてゼミをもったことである。教養部教員には「特別講義（特講）」が数年に一度まわってくる。人数制限が許される講義のことで、ゼミのような活動ができるのである。そこでは文章を書かせるゼミをもち、文学賞を受賞する学生も出たが、一年限りなので継承できない。学部ゼミは、初めての継承型のゼミナールだった。

ゼミでは、フィールドワークを使った江戸学を始めた。佐渡に拠点を置き、江戸時代の建築方法を忠実に反映した奉行所や、江戸時代に存在して今は佐渡にしか残っていない芸能などを中心に、生産や環境を含めた全体を地元の専門家に案内してもらいながら、芸能を実践して学ぶ方法である。文献だけではなく、生活を通しての学びをようやく始めることができた。同様のことを秋田県の角館や北秋田でおこない、大学院生とは島根でも実施するようになった。

社会学部に移ることで、副主任を経験することにもなった。亡くなった船橋晴俊学部長の時である。学科をまたがるコース・プログラム制を導入する時で、大変な作業量を抱えた執行部だった。執行部会議は長く、学部改革だけでなく、学生が起こした事件をめぐって裁判所にも通うことになった。入試以外の学部の執行に関わるのは、社会学部に移って初めて経験したが、様々な意味で興味深かった。学部運営も大学運営も、執行部がおこなおうと決断すればかなりの改革をおこなうことができる。しかし改革というものは良い結果ももたらすが、問題点も生じる。コース・プログラム制は選択の自由度を増したが、職員や学生の側からみるとあまりに複雑で、やがてなくなった。

社会学部で初めて知ったもうひとつのことは「同僚」という存在であった。授業やゼミについて迷ったときに相談すると、直接であっても同報メールを通してであっても、多くの助言が返ってきた。紫綬褒章を受けた時には、執行部が祝賀会を開いてくれた。学内外のことで共感や祝いの気持ちを伝えてくれる同僚を、私は初めてもったのである。

学部長・総長として

やがて学部長の打診が来るようになった。最初は、国際日本学インスティテュートの運営委員長が決まっていたときで、お断りするしかなかった。この運営委員長の2年間のあいだに、国際日本学インスティテュートを複数の研究科に支えられた不安定な組織から、人文科学研究科に所属する安定的な組織にした。しかしそれはほとんど、社会学部の故・相良匡俊名誉教授のご尽力によるものだった。相良匡俊教授は、国際日本学インスティテュートの設立と存続に、真に大きな役割を果

たされた。教養部出身であり、社会学部に専門分野をもたない私に、大学院における学生指導の機会を与えようと、国際日本学インスティテュートに誘って下さったのも、相良匡俊教授だった。このインスティテュートに対して、社会学部の中に批判する教員たちがいたことも、そのために相良匡俊教授が社会学部の中で孤立しておられたことも、私は承知している。しかし教員間の根柢のない分断がいかにかに大学を停滞させるか、経験から知っていた。社会学部の中にも排斥が存在することを、とても残念に思っていた。

国際日本学インスティテュートの運営委員長を退き、2012年と2013年には社会学部長をお引き受けした。学部長は学部長会議に出る。これは執行部内にいるときとまったく違う経験である。つまり全学の課題に触れるのである。たとえば私立大学にとって経常費補助金がいかに重要なものであるか、痛感することになる。学部教員に対してその補助金の条件となる取り組みをしていただかねばならない。学部長会議に出てくる全学の課題や議論をどう学部伝えるか、まずそれに絡むのが学部長の仕事だ。私は学部長会議のあいだ、ノートパソコンを常時開いて絶えずメモをとっていた。学部の要望を大学全体に理解してもらうためには、まず全学の方向を知り、そこに結びつけるかたちで納得してもらうのがもっとも早いからである。

国際日本学インスティテュートの運営委員長と社会学部長とは、全く異なる仕事だった。運営委員長も大学院の研究科長会議に出るのだが、この会議体が決めねばならない大学院の事項は膨大なものだった。未来への提案をおこなって議論するような余裕はない。また運営委員長には執行部組織がなく、教員たちの意見を聞いてひとりで考え、ひとりで決めねばならなかった。一方学部長には2人の主任と、一年で交代する1人の副主任がいる。主任・副主任たちの能力と働きによって、学部長はようやく仕事をすることができる。主任・副主任たちとの有効な議論の場がなければ、多くの混乱が生じるだろう。2年間支えてくれた中筋直哉教授と小林直毅教授には、この場を借りて改めて感謝の意を伝えたい。

この学部長の経験がなければ、総長選挙に立候補することはなかった。学部長は大学執行部や他学部の情報と意向を学部にもって帰るだけでなく、学部の課題を学部長会議においても課題にする必要があり、その結果、それが大学全体で共有されるのかどうかを知ることになる。学部長の時にわかったのは、多摩キャンパスの課題はほとんど共有されない、ということだった。この時期は55・58年館の建て替え直前で、その設計図や建築後の環境についての建設会社のプレゼンも、複数回開催されていた。ほとんどの学部にとってそちらが優先課題だったのだ。18歳人口の減少は目の前に迫り、多摩キャンパスに通う学生たちの不満や、バス運賃の負担感は大学全体にとっても大きな課題であるはずだったが、多摩の学部の都心移転の可能性を探ることもおこなわれず、法政大学の凋落の可能性は大きかった。増田壽男総長はあと1期を残していたが、退任することとなった。次の総長選挙には法学部所属の常務理事が立候補することが、ほぼ確実だった。総長選ではマニフェストを立て、立候補者は意見表明もする。多摩キャンパスの各学部、とりわけ社会学部の危機感は強く、この選挙に総長立候補者を出し、せめて意見表明をすべきだと思えた。総長選に積極的に関わろうとする社会学部の教員たちとともに、最初に立候補をお願いしたのは、故・船橋晴俊

教授である。しかし当時、船橋教授は原子力市民委員会を率いており、原子力行政について大きな責任を負っておられた。ご自身もそのことに注力したいとのご意志があり、断念した。

そこで、当時学部長であった私が立候補することとなった。2人の教授会主任、前学部長の金原瑞人教授、平塚真樹教授、増田正人教授、藤田真文教授など、そのほかにも多くの社会学部教員と一緒に行動してくれた。皆さんと相談しながら10項目のマニフェストを作った。そのなかの中心になったのが「キャンパス再構築」である。そのマニフェストは以下のとおりであった。

キャンパス再構築

- ・各キャンパスの充実とその再編に取り組む。今後の大学は、2020年より減少すると推定される18歳時入学者の教育にとどまることなく、生涯に渡って新たな勉学と研究を必要とする市民の学習の場としても、積極的に開いていかねばならない。そのためにはその機能を十全に果たせるキャンパス配置が必要である。その検討を早急に始める。
- ・中長期的な実施準備のための、全学的なキャンパス再構築委員会を組織する。
- ・中長期的な計画と連動させながら、短期的なキャンパスの課題を解決する方法を編み出す。

以上を整備する組織として、以下の項目を作った。

上記の諸政策を迅速に意思決定・実行するための学内組織の整備

- ・各キャンパスを責任ある意思決定が可能な組織とし、キャンパス再構築と連動させながら、現状を改善する。
- ・常務理事の増員に着手し、実現するまでの間、副学長制度を機能させる。

そしてキャンパス再構築を支える財政検討を含めた長期ビジョンの策定を提案した。

上記の諸政策を可能にする財政見直し・中長期ビジョンの策定

財政基盤検討会議を発足させ、一律予算削減の方針を見直す。その上で、2020年、2030年を目標に、持続可能な長期的財政見直しを立て、中長期ビジョン「Hosei2030」を策定する。中長期ビジョンにおいては、中高大がともにめざす人間像、教育研究水準を策定するとともに、各課題の実現に向けた計画を立てる。

社会的評価の刷新も大きな課題だった。そこでマニフェストには以下の項目も入れた。

法政大学は、高度な研究・教育能力をもつ、日本でも有数の私立大学である。学生たちも卒業後は社会の各方面で活躍をしている。しかし、こうした本学の真の実力が、社会で正しく評価されているとはいえない。本学の教職員、卒業生、学生のような声や願いを広く聞き取

り、その中に秘められた潜勢力をていねいに掘り起こすことによって、本学の価値を高め、社会的評価を刷新することが必要である。全学が一体となって新たなイメージを創造・発信したい。早急に取りかかるとともに、持続的に実施できる仕組みを整える。

2013年の10月末、以上を一部とする10のマニフェストを掲げて2014年度総長選挙に立候補し、当選した。総長立候補者から総長予定者になると取材が入りはじめた。取材にはすべて応じたが、実際はそれどころではなかった。社会学部から増田正人教授を理事に指名し、平塚眞樹教授に総長室長になっていただき、理事会の体制が整うと、当時の理事会からまるごと預けられたのが、SGU（スーパーグローバル大学創生支援）への申請作業だったのである。学部長をつとめながら総長の仕事的一端をおこなっているような状態になった。

4月からは学部長の仕事を田中充教授に引き継いでいただき、取材に応じながら「ブランディング戦略会議」を発足させた。入学式は『AERA』で大きく取り上げられ、広報の面では順調な滑り出しだったが、ブランディングとは知名度を上げることではない。社会学部の青木貞茂教授と藤田真文教授の助言を受けながら、「社会との約束」としてのブランディングに、実直に本格的に取りかかったのである。ブランディング戦略会議はやがて学内の様々なところでワークショップを開きながら、マニフェストで約束した「新たなイメージの創造・発信」のもとになる言葉を積み上げていった。その結果できあがった一連の言葉を、「大学憲章」と呼ぶことにした。このワークショップや、ブランディング戦略会議（現ブランディング推進チーム）は総長室広報課のもとにあり、その全体を統括してくれたのが平塚眞樹総長室長だった。私の発信するメッセージはすべて、平塚総長室長の目を通して。広報の立場から、社会全体のまなざしを熟慮し、筆が走り過ぎる私の文章にブレーキをかけ、正確でバランスのとれた言葉にくださった。総長室長のもうひとつの役割は、各々の担当をもつ常務理事たちのあいだをつなげ、誤解を生みやすい職員と教員のあいだに立つことだ。さらに、私の名代として、難しい立場に置かれた学生の保護者に連絡をとることも複数回あった。

長期ビジョン「HOSEI2030」の策定と実行の組織である推進本部会議の事務も、総長室が分掌している。それを構成するそれぞれの組織のあいだをつなぐのも、総長室長であった。コロナ禍のなかで、迅速と正確が要求される広報の先頭に立ってくれたのも、平塚総長室長だった。この7年間、増田正人理事はもちろんだが、平塚総長室長の果たした役割がいかに大きく、いかに重要なものであったかは、常務理事たちはもちろん、多くの職員が異口同音に述べている。私にとっては、感謝という言葉ではあまりに軽すぎる。平塚総長室長がいなければ、私は失敗の連続だったろう。しかしこの7年間、社会学部の有能なメンバー2人が総長を支えることになった。社会学部全体に感謝するとともに、まことに申し訳なかったとも、思っている。

さて、長期ビジョン「HOSEI2030」の策定が発足するとともに、6月にはSGUの申請書を出し、8月に面接がおこなわれ、秋には採択された。全大学中、採択された大学は4.7%に過ぎない。SGUの申請は、法政大学がすでに1970年代からもっていた留学支援に力を入れる方向性と、その

なかで作り上げてきた国際文化学部やグローバル教養学部などの学部，ESOPの活動，持続可能性への取り組みなど，すでにある特質をもっておこなったものである。無理をして申請したものではない。むしろ「新たなイメージの創造・発信」というマニフェストにかなうものだ。

2015年度，法政大学の志願者は初めて10万人を超えた。長期ビジョン「HOSEI2030」の策定を終え，2016年度最初に公表し，16の作業部会を作って新しい段階に入った。2017年度には志願者はさらに増えて約12万人となった。長期ビジョンはアクション・プランの実行に入った。2018年度には志願者が12万人を超えた。総長就任前にすでに決定されていた新校舎建築が終わり，「大内山校舎」が完成した。2020年度には，長期ビジョンのアクション・プランによって進めてきたH O S E Iミュージアムの運営が開始された。その間に「キャンパス再構築」は特設部会となり，3キャンパスにそれぞれの会議体ができ，課題を独自に協議できるようになった。多摩キャンパスの課題がどう議論されてきたか，その過程はHOSEI2030の報告やニュースに記録され，それは専任教員であればH P内で読むことができる。2019年度は多摩キャンパス将来計画委員会において多摩キャンパス将来計画基本構想の策定がおこなわれ，2020年度は多摩キャンパス将来計画実行計画が策定された。2021年度4月からは，その実行のために，総長室付多摩企画室を作り，キャンパスマネジメントを一元化することになっている。

2020年度は，新型コロナウイルスの感染拡大のなかで，全学部が経験したことのない授業形態をとることになった。しかしこの経験は，多摩キャンパスの授業を今後，オンラインと対面のハイブリッド型授業や，対面を同時オンライン化するハイフレックス型授業に転換する可能性をもたらした。学生にとってはより自由な選択ができ，だからこそ「義務で行く場所」ではなく，活動拠点として自ら自由に関わる場所としての魅力あるキャンパスが必要になった。多摩キャンパス将来計画実行プランにおける「リ・デザイン」構想は，自分たちで町を創るような，新たな拠点創造の可能性を持っている。

私は総長としても教員としても法政大学を去っていくが，ようやく，28歳の時に専任講師として就任したとたんに味わった「多摩キャンパス新学部」の挫折と教員間の分裂の記憶から，抜け出せるような気がしている。

結社としての法政大学

最後に，法政大学の歴史について，多摩キャンパスのことも含め，あまり語られてこなかったことを書いておきたい。まず法政大学は明治13（1880）年に「東京法学社」という名前で始まった。3人の20代の若者が，この学校を作った。3人は金丸鉄（まがね）28歳，伊藤修25歳，そして薩埵正邦24歳で，この薩埵正邦がボアソナードの弟子であった。時間順に言うと，金丸鉄と伊藤修が東京法学社を創り，薩埵正邦が次の年に，それを「東京法学校」としたのである。澤大洋は「民権派代言事務所と私立法律学校の創成」（『東海大学政治経済学部紀要』1991年）で，以下のように書いている。

1880年5月に司法省布達で「改正代言人規則」（全4款29条）と「代言人取扱手続」（全13条）を布告、代言人を検事の監督に属させ、地方毎に組合を設立させて、組合以外の私的結社を禁止した。これは民権派代言事務所等にとって致命的となり、北州社以下の初期代言事務所が表面的に解散せざるを得なくなった。

たいへん興味深い内容だ。「東京法学社」は法律を講義する「講法局」だけでなく、弁護の実務訓練を行う「代言局」を擁していた。しかし政府が民権運動の一大勢力であった「代言人結社」の取り締まりに乗り出したのである。そのために作った、「改正代言人規則」によって、財政的存立基盤であった代言事務所が禁止されたのである。学校史の側から言えば、相互扶助的な代言兼業の私塾的な組織から永続的な専門学校へ、近代学校としての組織的確立を要請された結果、ということもできる。薩埵正邦は講法局を東京法学社から分離独立させて「東京法学校」を創立した、ということになる。しかし別の角度から見ると、民権派弁護士の活動を排除することによって法政大学ができた、ということもできるのである。その後、ポアソナードのフランス法を基本にしたことで、1889年には「和仏法律学校」となり、1903年には「財団法人・和仏法律学校法政大学」となり、1920年に「財団法人・法政大学」となった。

しかしその発展の方ではなく、さらに時代を遡ってみる。なぜ金丸鉄と伊藤修は、代言局と講法局を兼ねた東京法学社を作ったのか？ これは学校だったのか、結社だったのか？

金丸鉄と伊藤修は江戸時代に生まれ育った。その二人が東京で法律の学校を作った背景には、2つの重要な要素があった。1つは、「素読・講義・会読」の仕組みをもった藩校と私塾で学んだことで、議論の能力をもっていたことである。金丸鉄、伊藤修は現在の大分県にある杵築藩士の家の出身である。伊藤家は私塾をもち、金丸鉄は杵築藩校でフランス語を学んだ。フランス語の学習については佐野雋達（しゅんたつ）、法律の学習については元田直（なおし）という人たちが杵築にいた。江戸時代の藩校や私塾では、素読（字突棒で文字を指しながら声に出して読み、生徒がそれを復唱する。音読により身体で覚える）、講義（記憶したそれらの言葉の意味を掘り下げた講義を聴く）、会読（学生が交代で自ら講義し、それに対して学友たちとの質疑と議論を繰り返すディスカッション）という過程で、教育がおこなわれていた。彼らにはすでに、考え、議論する力がついていたのである。多くの藩士たちによって明治時代が作られたのは、江戸時代のその学び方に理由があった。

二人が東京で法律の学校を作った背景の2つめは、東京法学社が作られた1880年、日本が議論で沸き立っていたことだ。1880年当時、日本には、名前が判明しているだけでも2000社を超える「結社」があった。政治や法律への意識と意欲をもち、議論するための結社である。江戸時代が終わり、政治や法律を担っていた武士たちがいなくなり、農民、町人、そしてもと武士たちが垣根を越えて議論する必要がある。「身分」というものを持たない市民たちが、憲法の制定と国会の開設を目的として、盛んに読書会を開き、議論をし、演説会を開催したのである。これらの結社につ

いて色川大吉は、「さまざまな性質をはらんだ新しい何か」「さまざまな機能を内在（あるいは潜在）させていた総合的な組織」「“学ぶ”“助ける”“稼ぐ”“戦う”“楽しむ”“開く”ことによって、人間の全体性をめざす新しい結社」と表現した（色川大吉『自由民権』岩波新書）。色川大吉によると、結社は「純然たる学習結社」「純然たる政治結社」「学習結社と政治結社の両方の性格を兼ね備えた結社」「民衆生活一般に関する結社」に分類できるという。その「民衆生活一般に関する結社」は、相互扶助、勸業・勸農、愉楽・教授、交流懇親などがあった。相互扶助の結社のなかに、法律相談や代言業務をおこなう結社があった。東京法学社は、このような結社のひとつだったと考えられる。

ところで、東京法学社が作られたその1880年、相原の青木勘次郎は私立学校「養英館」を作った。相原駅の向こう側にある現在の青木医院（東京都指定史跡・青木家屋敷）の場所である。坂本龍馬の海援隊で活躍し、後に板垣退助らとともに自由党結成に参加して副総理となった中島信行が1881年7月、この養英館で講演をした。その様子を『東京横浜毎日新聞』に書いている。「来会する者意外に多くして満場殆ど立錐の地を余さず頗る盛会なりしとぞ」とある。養英館は私立学校であったが、同時に自由民権運動の拠点として作られたのである。そこに、多くの人々が集まった。

同じ1881年の4月、朝野新聞の編集長で自由党などの議員にもなった末広鉄腸の演説会が、多摩キャンパスから相原駅に向かう途中にある長福寺でおこなわれた。末広鉄腸はこの時のことを朝野新聞に書いている。やはり、風と雨が激しくてとても人など集まるまいと思っていたが、200人を超える人々が集まったという。相原のことを「武蔵と相模の間に在る一寒村」であるにもかかわらず、よほど演説が盛んな土地なのだろうと述べている。1882年には、青木勘次郎の息子で後に衆議院議員となった正太郎が、相原村に「講学会」という民権学習結社をつくった。

法政大学は単にヨーロッパの大学を移入した学校ではなかった。江戸時代以来の議論する場であり、新しい社会に向かう運動の場である「結社」として作られたのであった。存続のために変転を重ね、今もその途上にある。退職にあたって、「結社としての法政大学」を忘れないようにしたい。また相原村は、新しい社会に向かおうとする多くの人々の議論の場所であった。そのことも、忘れないようにしたい。相原村の精神はもはや相原町としては受け継がれていない。それならば法政大学多摩キャンパスこそが、その精神を受け継ぐ「町」になって欲しい。

ところで、本寄稿では強い印象をもった学生たちについて触れることができなかった。最後に少しだけ書いておきたい。教養部教員時代、80年館の研究室に通ってきては、私の話を聞きながらメモし続けていた文学部の学生がいた。勉学以外にも驚くほどさまざまな活動をおこなっており、卒業後に京都大学に入った。その根津朝彦は現在、立命館大学の准教授である。今やジャーナリズム史の専門家として他の追随を許さない。彼には社会学部で代講をしてもらっていた。

社会学部に移ってから私のゼミに入ってきた内原英聡は、沖縄県石垣島の出身で、卒業後は国際日本学インスティテュートで修士号と博士号を取得した。彼にも社会学部で代講をもらった。ゼミはいつも選抜の必要があったのだが、選抜の際に提出された内原の文章に私は驚き、ぜひゼミのメンバーになって欲しいと思った。『カムイ伝講義』は実質的に内原との共著である。現在、石

垣市議として活躍している。

その他にも社会学部とつながりのある、あるいは国際日本学インスティテュートで教えた印象深い学生たちはいるが、きりが無い。ここまでにして。いずれの学生も、いわゆる優等生ではなかった。他の学生にはない行動をとる傾向があり、マジョリティに同調しなかった。学ぶことを面白がり、自由を生き抜いていた。それはたやすいことではなかったはずであり、これからもそうだと思うが、もはや教員としてではなく、一人の人間として敬意をもって、彼らの生き方をみつめて行きたいと思っている。